

国立国会図書館 月報



誌面でふりかえる企画展示 知識を世界に求めて

企画展示関連講演会「翻訳学の視座から読む明治の文学翻訳者の言説
—なぜ、いかにして訳すのか—」齊藤 美野

子ども読書の日「創造力は読書から」安藤忠雄氏講演録

デジタルコレクション、リニューアル～その機能を探る～

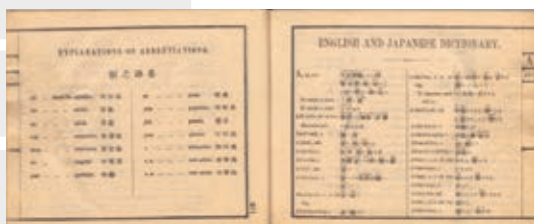
世界図書館紀行 ルクセンブルク国立図書館

国立 国会 図書館 月報

NO. 743
MARCH 2023

CONTENTS

- 1 『通俗伊蘇普物語』——明治時代のイソップ物語——
今月の二冊 国立国会図書館の蔵書から
- 6 誌面でふりかえる企画展示 知識を世界に求めて
- 10 企画展示関連講演会
「翻訳学の視座から読む明治の文学翻訳者の言説——なぜ、いかにして訳すのか——」 齊藤 美野
- 16 子ども読書の日
「創造力は読書から」 安藤忠雄氏講演録
- 19 デジタルコレクション、リニューアルとその機能を探る
- 24 世界図書館紀行 ルクセンブルク国立図書館
- 18 館内スコープ
大人にこそ伝えたい
- 23 本屋にない本
『日本の素朴絵』
- 32 NDL TOPICS



表紙：『英和対訳辞書』
荒井郁〔之助〕編，小林新兵衛，1872年，16×22cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1871490/1/7>

『通俗伊蘇普物語』 —明治時代のイソップ物語—

横山裕里恵



巻1の冒頭

通俗伊蘇普物語

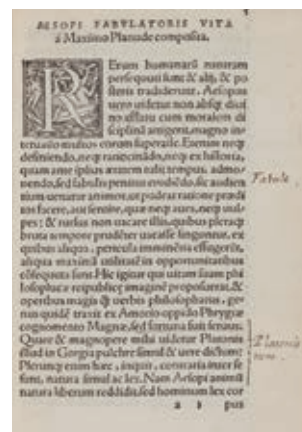
トマス・ゼームス『通俗伊蘇普物語』全6巻
渡部温(無尽蔵書齋主人)[和訳], 1873年頃, 23cm
<請求記号 特40-137>



『伊曾保物語』3巻, 伊藤三右衛門, 万治2[1659]
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2532213/1/62>
江戸時代に刊行された『伊曾保物語』の挿絵。「アリとキリギリス」ではなく「アリとセミ」の話になっている。セミに対し夏に歌わず冬に備えて働けというのは現実的には酷な要求ではないだろうか。

『通俗伊蘇普物語』はイソップ物語の明治初期の翻訳作品である。「ウサギとカメ」や「アリとキリギリス」、「金の斧」をはじめ、今日でも親しまれる物語の数々を子どもにも分かりやすくかつ的確に訳した名翻訳とされる。イソップ物語自体は、16世紀後半には既にヨーロッパのキリスト教宣教師によって持ち込まれ、『伊曾保物語』として流通していた。とはいえ、改めて英訳版から翻訳し、200話を超える寓話を紹介した本書が日本でのイソップ物語の普及に果たした影響は小さくないと言われる。

外国のイソップ集



国際子ども図書館所蔵の最も古い外国の本は実はイソップ物語である。1538年の発行で、左側はギリシャ語、右側はラテン語で同じ内容が記されている。語学学習用に使われたものと思われる。

Aesopi Phrygis Fabulae graece et latine, cum aliis opusculis, quorum, index proxima refertur pagella, Basileae: Officina Heruagiana, 1538 <請求記号 Y8-B4820 >

原書（英訳版）の挿絵画家



ジョン・テニエルによる『不思議の国のアリス』の挿絵

Lewis Carroll, *Alice's adventures in Wonderland*, London: Macmillan and Co., 1886

<https://dl.ndl.go.jp/pid/3947683/1/68>



19世紀イギリスで翻訳、出版されたイソップ物語

Walter Crane, *The baby's own Aesop: being the fables condensed in rhyme, with portable morals pictorially pointed*, London: George Routledge & Sons, 1887 <請求記号 Y17-B4825 >

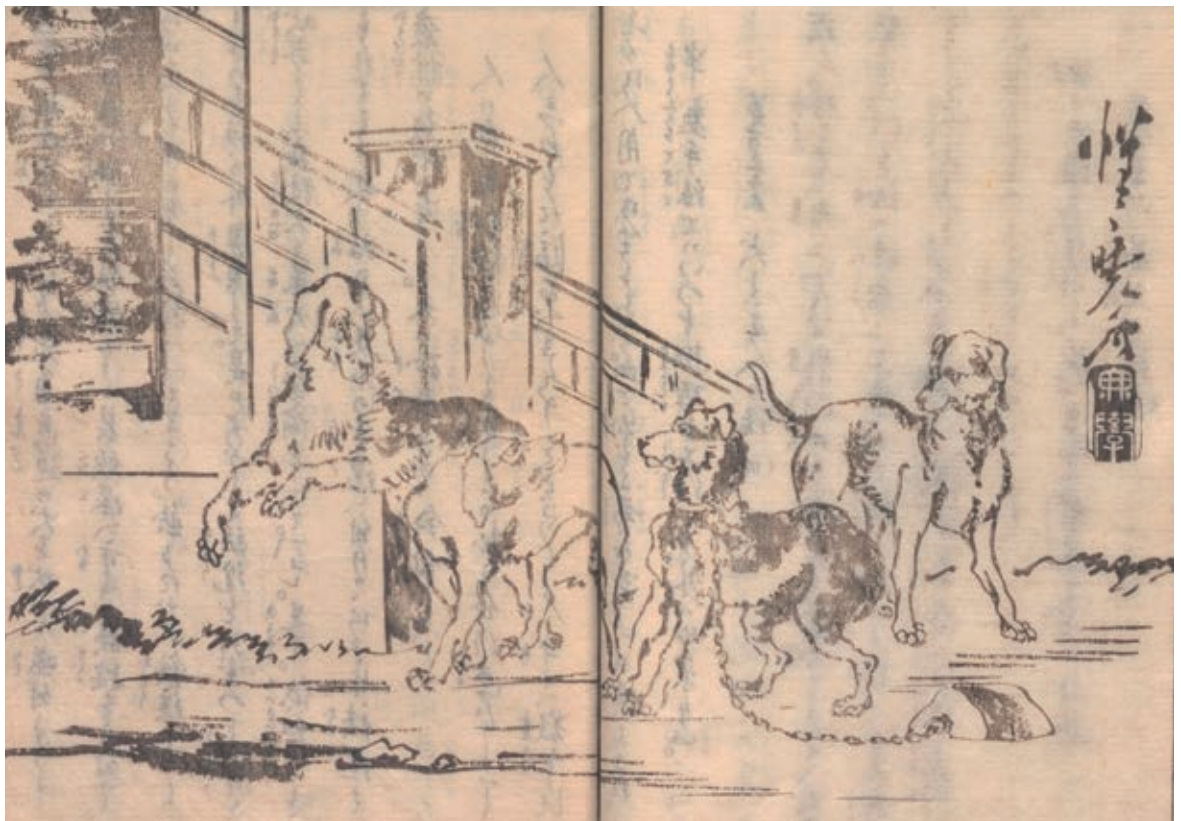
そもそもイソップ物語とは、古代ギリシャに実在したとされる人物イソップが語ったと信じられている物語の集合である。15世紀まで多くはラテン語やギリシャ語で綴られた。15世紀以降、こうした古典言語のみならず、西洋各地の言語で様々なイソップ物語が刊行され、多くの読者を獲得していくことになる。本書の巻一から五の元となったのも、トマス・ジェームズによる英訳版である。ジェームズ版は『不思議の国のアリス』を彩ったイラスの数々で知られるジョン・テニエルの挿絵入りであり、そのためもあってか好評を博したと言う。最終巻の巻六のみ特殊で、ファイラー・タウンゼントによる英訳版と『伊曾保物語』に由来する寓話を収録し、ジェームズ版にない話も補完している。

訳者の渡部温（1837～1898）は初めに蘭学、次いで英学を学び、幕末には幕府の洋学研究機関で英学を講じた。明治に入ってから沼津兵学校の教官を務めた後、明治政府に出仕し、明治8（1875）年には東京外国語学校（のちの東京外国語大学）の学長に就任している。後年には渋沢栄一と共に東京瓦斯（東京ガス）や東京製綱の創設にも関わっており、多彩な経歴の持ち主である。

渡部は本書の序文で翻訳した目的を綴っているのだが、そこには「徳教を婦幼に説示す」とある。



訳者 渡部温
吉野作造 編『明治文化全集 第十四
卷』日本評論社, 1927 <請求記号
081.6-M448-Y>



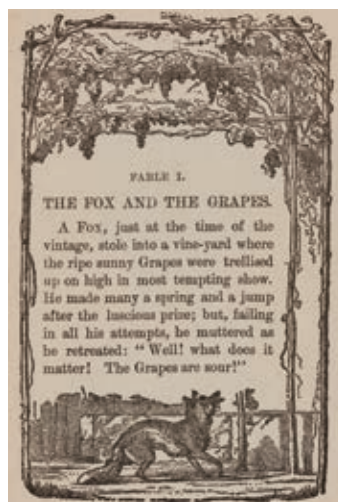
幕末から明治にかけて活躍した絵師、河鍋暁斎による挿絵の数々。
(上から) 巻1「獅子の恋慕の話」、巻4「暴犬の話」、巻6「旅人と猿の話」

「ちかみち径捷」とあり、彼が明治の新時代に人々に必要
な道徳を教える教科書として本書を選び
取ったことが分かる。続く部分では彼の翻訳
の上での指針も述べられる。こうした動機を
反映して、「わかちやすき易解をむね主旨として、げんぶん原文の意に
随したがひつ。俗言俚語にて書取かきとりたり。」とあり、
分かりやすいように日常的な言葉で訳された
ことが分かる。

「狐と葡萄の話」の英訳版

A Fox, just at the time of the vintage, stole into a vine-yard where the ripe sunny Grapes were trellised up on high in most tempting show. He made many a spring and a jump after the luscious prize; but, failing in all his attempts, he muttered as he retreated: "Well! what does it matter! The Grapes are sour!"

Thomas James (rev.), *Aesop's fables*, New York: Grosset & Dunlap <請求記号 Y8-B2706 >



この分かりやすさを主眼とした渡部の訳文がどのようなものだったのか、少し見てみよう。巻一の冒頭には、「すっぱい葡萄」の例え話として知る人も多いだろう「狐と葡萄の話」が収録されている。

或日狐葡萄園にはいり。赤く熟せし葡萄の高き架より披離にさがりたるを見て。是は甘さうじやと。鼓舌をして賞揚て。幾度となく躍上り踊上りたれどもとどかず。そこで狐が怒を発て。ヨシ。なんだこんなものを。葡萄はすっぱいぞ

一読者として大変なめらかで読みやすい。一方、他のページではどうか。例えば「金の斧」の物語を読むと、木こりに金の斧を授けるのは「水星明神」である。これはローマ神話に登場する神、マーキュリーの訳である。

マーキュリーは水星の名前でもあるので、このような訳語を編み出したのだろう。古代ギリシャやローマの概念を日本人にも理解しやすい言葉に置き換えようという明治の人の苦心と工夫のほどが窺える。

イソップ物語は本書以降にも、数多くの日本人が翻訳していくことになるのだが、国語学者の上田万年(1867~1937)の『新訳伊蘇普物語』では、金の斧を木こりに授ける人物は「水神」となっている。マーキュリーは男神であり、英訳版の挿絵でも男性的な姿で描かれているのだが(次ページ参照)、挿絵画家が水の神という訳から女性の姿をイメージしたのか、上田版では女性的な外見で描かれている。「水星明神」から「水神」、そして「女神」へ。こうした日本化の変遷をたどりながら、明治時代の翻訳作品を読んでみるのも面白いだろう。

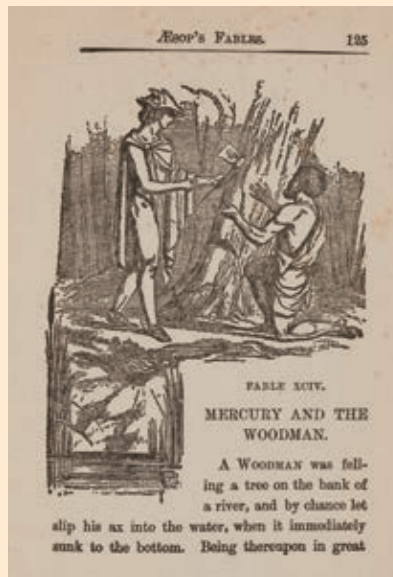
○参考文献 ※<>内は当館請求記号

- [イソップ][著], 渡部温 訳『通俗伊蘇普物語』(東洋文庫) 平凡社, 2001 < KP31-H39 >
片桐芳雄「渡部温の『通俗伊蘇普物語』について」河鍋暁斎記念美術館 編『暁斎 Kyōsai 河鍋暁斎研究誌』39, 1989.10 < Z11-1044 >
片桐芳雄「幕末明治の洋学者・渡部温(一郎)覚え書-1-」『愛知教育大学研究報告』教育科学 編32, 1983.1 < Z22-644 >
片桐芳雄「幕末明治の洋学者・渡部温(一郎)覚え書-2-」『愛知教育大学研究報告』教育科学 編33, 1984.1 < Z22-644 >
加藤康子・三宅興子・高岡厚子 著『イソップ絵本はどこからきたのか 日英仏文化の環流』三弥井書店, 2019 < KP25-M1 >
吉川斉 著『「イソップ寓話」の形成と展開 古代ギリシアから近代日本へ』知泉書館, 2020 < KP25-M4 >
スコット・ジョンソン, 二階堂均 訳, 山口静一 補訂「寓話の挿絵 ヴィクトリア朝の『イソップ物語』と明治時代の『通俗伊蘇普物語』」河鍋暁斎記念美術館 編『暁斎 Kyōsai 河鍋暁斎研究誌』15, 1983.7 < Z11-1044 >
※引用の旧字は通用の字体に改めました。

さまざまな「金の斧」の翻訳と挿絵



上田万年解説・梶田半古画『新訳伊蘇普物語』鐘美堂, 1907
<https://dl.ndl.go.jp/pid/896979/1/82> (モノクロ画像)



(右) Thomas James (rev.), *Aesop's fables*, New York: Grosset & Dunlap <請求記号 Y8-B2706 >

(左) [巖谷]小波 [著][他]『小波お伽全集第14巻(教訓篇)』吉田書店出版部小波お伽全集刊行會, 1934

誌面でふりかえる企画展示

知識を 世界に 求めて

2年ぶりに開催した東京本館での企画展示「知識を世界に求めて―明治維新前後の翻訳事情―」は、好評のうちに終了しました。

展示した資料はさまざまなジャンルの翻訳書等200点以上。ここ20数年の展示会で最も多くの資料を出展しました。来場された方は、お目当ての資料や興味のある分野以外にも、資料との出会いや発見があったのではないでしょうか。

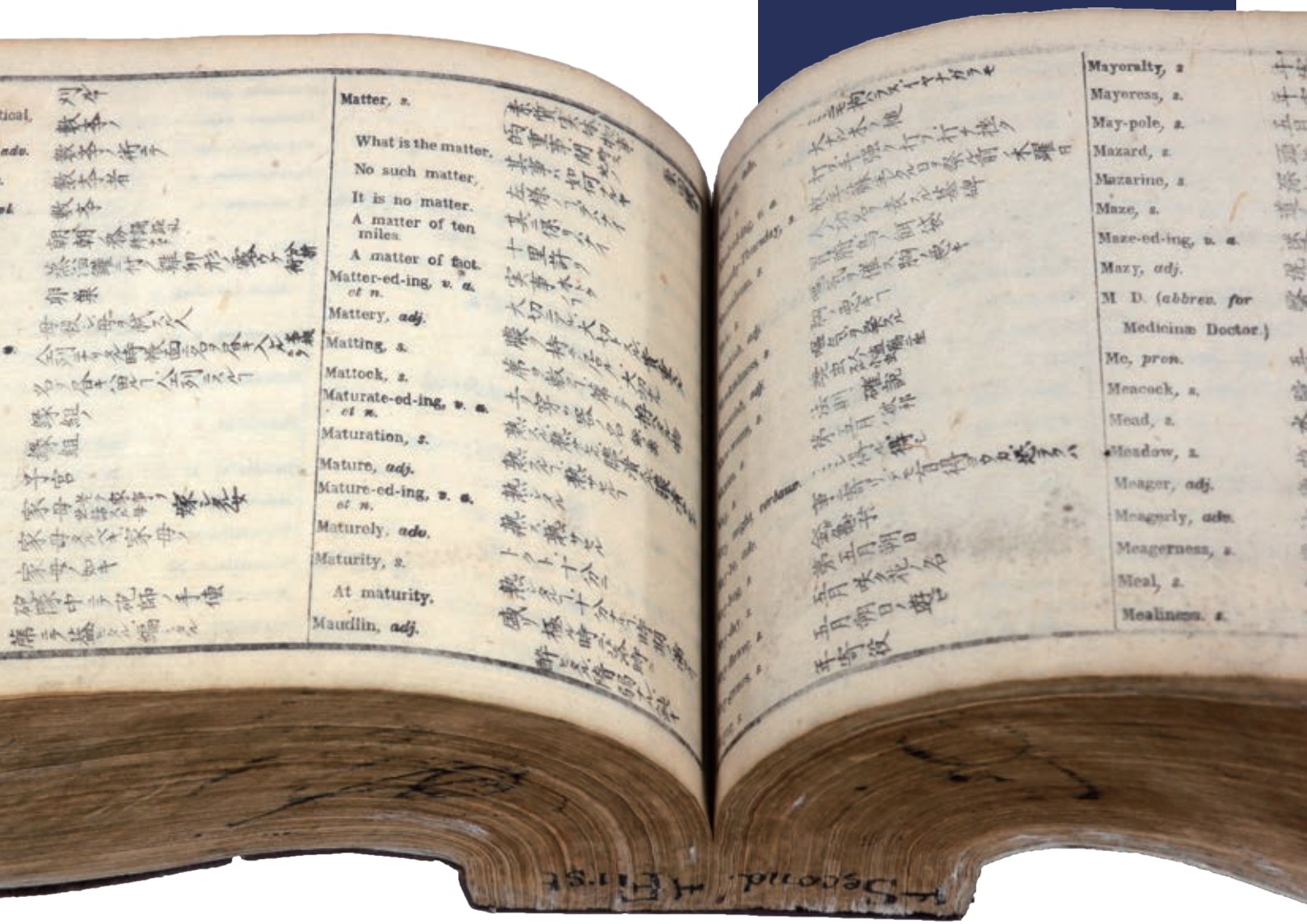
本号では、展示会に来られなかった方に展示会の様子をお届けするとともに、令和4年11月12日に開催した関連講演会の様子もお伝えします。

なお、出展した資料・解説をまとめたウェブページを公開しています(9ページ参照)。本記事とあわせてお楽しみください。

(利用者サービス部サービス企画課)

開催概要

会場：国立国会図書館東京本館 展示室（新館1階）
会期：令和4年11月11日（金）～12月9日（金）



印象に残った展示資料

来場者にご回答いただいたアンケートで、「印象に残った資料」として最も名前が挙がったのは、『解体新書』でした。展示冒頭で紹介した資料であったことに加え、教科書などでもなじみのある資料の実物が見られたため、印象に残った方が多かったのかもしれない。



来場者アンケートで最も名前が挙がった『解体新書』

「鎖国」の由来

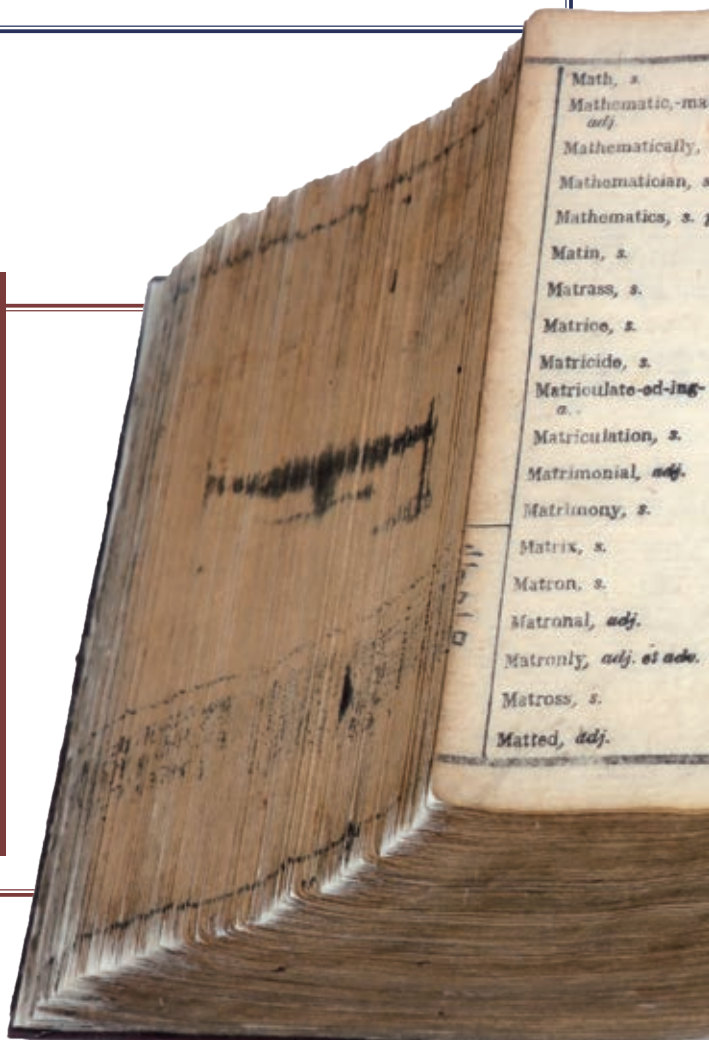
江戸時代に、いわゆる「鎖国」をしていた日本。その「鎖国」という言葉も、実は翻訳から生まれたものです。医師として長崎に滞在したドイツ人・ケンペル (Engelbert Kämpfer) が日本について記した『日本誌』(De beschryving van Japan) の中の一節を、江戸後期の蘭学者・志筑忠雄が『鎖国論』と訳したのがきっかけでした。



"De beschryving van Japan" (右) と『鎖国論』(左)

ポケット辞書が枕辞書に

展示会のポスターでメインビジュアルを飾っていたのがこの資料。幕府の通詞である堀達之助が中心となって作成した日本初の英和辞書『英和対訳袖珍辞書』です。展示会では、慶応3(1867)年版、明治2(1869)年版の2点を展示しました。俗に「枕辞書」とも呼ばれるほど分厚い辞書ですが、書名の「袖珍」とは小型という意味です。この辞書の元になったのが、ポケットサイズの英蘭辞書だったためです。

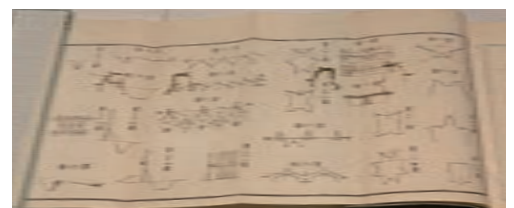




西洋式の城のつくりかた

安政4（1857）年に築城された五稜郭は西洋式の城郭ですが、オランダ語から翻訳された『築城典刑』には、五稜郭によく似た形の図が掲載されています。

この本を翻訳した大鳥圭介は、のちの戊辰戦争では五稜郭で戦いました。不思議な巡り合わせですね。

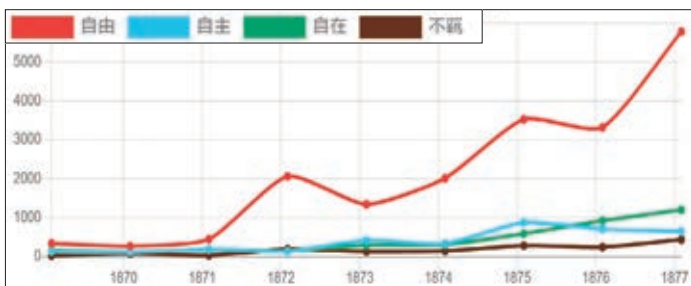


"Handleiding tot de kennis der versterkings-kunst..." (上) と『築城典刑』(下)

「自由」が定着するまで

左の画像はJ・S・ミルの『On Liberty』を訳した『自由之理』（中村正直訳）の冒頭部分です。展示会のポスターの背景となっていたのがこの資料です。

明治初期、libertyやfreedomの訳語には「自主」「不羈」「自在」などもありましたが、本書の影響もあって「自由」が広く定着したとか。国立国会図書館の実験サービス、NDL Ngram Viewer*でもその様子がうかがえます。



デジタル化資料のOCR全文テキストから「自由」等の出現頻度をグラフ化したもの。『自由之理』が出版された明治5（1872）年以降、「自由」の出現頻度が増えています。

* デジタル化資料のOCR全文テキストから、出版年代ごとのキーワードの出現頻度を可視化・列挙することができるサービス (<https://lab.ndl.go.jp/ngramviewer/>)。

明治時代のシェイクスピア

こちらはアンケートやSNSで好評だった、シェイクスピア作品の翻訳書です。

『ヴェニス商人』は『人肉質人裁判』や『桜彼彼銭世中』、『ジュリアス・シーザー』は『自由太刀余波鋭鋒』(13ページ参照)といったタイトルで出版されています。一見して外国の作品とは思えない邦題の数々に、興味を惹かれた方が少なくないようです。



『ヴェニス商人』を翻訳した『何桜彼彼銭世中』



シェイクスピア作品の翻訳書 5点

明治時代の辞書類

今回の企画展示に関連し、東京本館の国立国会図書館ギャラリーで辞書の展示を行いました。主に明治時代の辞書を中心に、ドイツ語、ロシア語、専門辞書などを展示しました。



国立国会図書館ギャラリーの様子。
概ね月替わりでさまざまな資料を展示しています。

オンラインでも展示を楽しめます

リサーチ・ナビの「探す」ギャラリーでは、展示会出展資料のうち約100点と、解説を公開しています。

展示会では見開き2ページしか見られなかった資料も、リンク先の国立国会図書館デジタルコレクションでは、好きなページを開いてご覧いただけます。

会場に来られなかった方も、是非こちらのページでお楽しみください。スマートフォン等でもご覧いただけます。



<https://rnavi.ndl.go.jp/jp/gallery/exhibit2022.html>



第4章第2節「明治初期の翻訳文学」・第3節「純文学の翻訳の始まり」の展示の様子

企画展示関連講演会

翻訳学の視座から読む

明治の文学翻訳者の言説

——なぜ、いかにして訳すのか——

齊藤 美野

(順天堂大学国際教養学部准教授)

企画展示「知識を世界に求めてー明治維新前後の翻訳事情ー」の第4章では「翻訳文学の歩み」と題して、翻訳文学とその原書約70点を展示しました。

これにあわせ、企画展示の関連講演会として、11月12日に齊藤美野先生をお招きし、明治の翻訳文学について、オンライン形式でご講演いただきました。

ここでは、講演会の内容をダイジェストでお伝えします。

(講演筆記・文責 利用者サービス部サービス企画課)



齊藤 美野 氏

順天堂大学国際教養学部准教授。専門は翻訳学・異文化コミュニケーション学。主な著書に『よくわかる翻訳通訳学』『近代日本の翻訳文化と日本語 翻訳王・森田思軒の功績』ほか。

翻訳学とは

私は翻訳学・異文化コミュニケーションを専門としています。「翻訳学」という言葉は初めて聞いたという方も多いかと思いますが、翻訳の実践と理論について考える学問です。ある言語から別の言語へどのように訳すとよいのかなど実践的なことを考えることもあります。翻訳って一体どういうものなのか、どんな役割があるのかという抽象的なことを考えていく学問でもあります。私の基本的な姿勢としては「翻訳は異なる文化に属する人たちをつなぐもの」と説明することが多いです。今日はそういう観点からお話ししたいと思います。

明治期の翻訳文学の位置

翻訳文学というのは文学の一つのジャンル、翻訳された文学作品です。対比するものとして、創作文学があります。創作文学の方が力をもっている、主流であるということが世界各地、色々な時代で起こっていることなのですが、明治期については必ずしもそうではありませんでした。こちらは森田思軒の訳した『十五少年』です(下画像)。翻訳者名はタイトルの下にしっかりと書いてあるのですが、原著者であるヴェルヌ(Jules

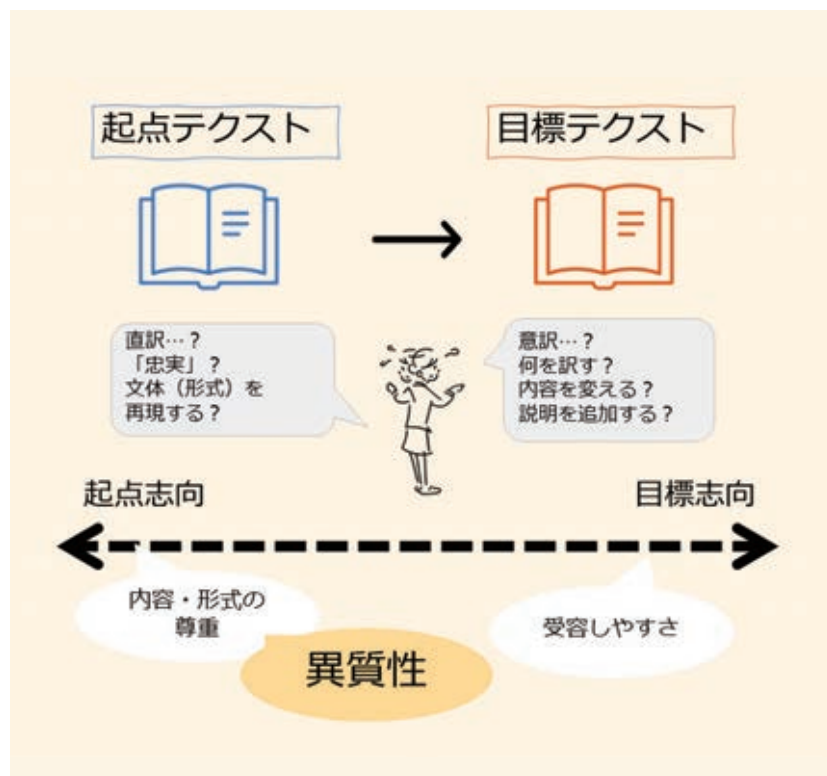
Gabriel Verne)の名前は書かれていない。

著者よりも翻訳者が重要視されていたことが分かります。現在、たとえばスペインのある翻訳文学作品では翻訳者名は表紙に載せる情報として扱われていないのですが、こうした国・地域は今でも多いのです。日本では翻訳者名が表紙に載りますよ、という話をするとう海外の翻訳学の研究者に驚かれることもあります。ちなみに原著者名がちゃんと載っている明治時代の翻訳書もあります。

起点テキストと目標テキスト

翻訳の世界では、起点テキストと目標テキストと呼ばれる二つのテキストがあります。起点テキストは翻訳の元になる原著で、それが翻訳されて目標テキストになります。起点テキストの原著者と目標テキストの読者をつなぐコミュニケーションを担っているのが翻訳者です。

訳し方にはいろいろありますが、一般にも使われる表現で有名なのは「直訳」と「意訳」だと思います。起点テキスト、目標テキストのどちらを大事にするかで起点志向と目標志向がありますが、直訳は起点志向、意訳は目標志向だと考えることができます。起点志向は原著の内容や形式を、目標



ジュール・ヴェルヌ 著・森田思軒 訳『十五少年』
博文館 明治 29 (1896) 年 [74-24]

志向は受容しやすさを尊重します。起点テキストの内容と形式を尊重すると異質な要素をもった翻訳テキストが生まれる可能性が高まります。読んだ人になんかちよつといつもと違うな、違和感があるなど思わせたり、不快さを与えるケースもありますが、かっこいいなどポジティブな感想につながる場合もあります。

柳田泉の「三変説」

明治前期に文学翻訳がどのように変化したのか、3期に分けて表した「三変説」を紹介します。明治22(1889)年に刊行された翻訳文学『夜と朝』の、森田思軒によって書かれた序文を元にし、明治文学の研究者、柳田泉が説明したものです。

第1期が翻訳文学のはじまりと言われる『花柳春話』という作品が出るまで、この時期は訳される作品数も少なかったとされます。第2期は『花柳春話』の登場以降で、翻訳の作品数も増えてきました。そのあと明治18(1885)年になると『諷世嘲俗繫思談』という大事な作品が出版されて、第3期が始まります。

第1期、第2期では起点テキストの大体の筋をとって、内容を自由に足したり

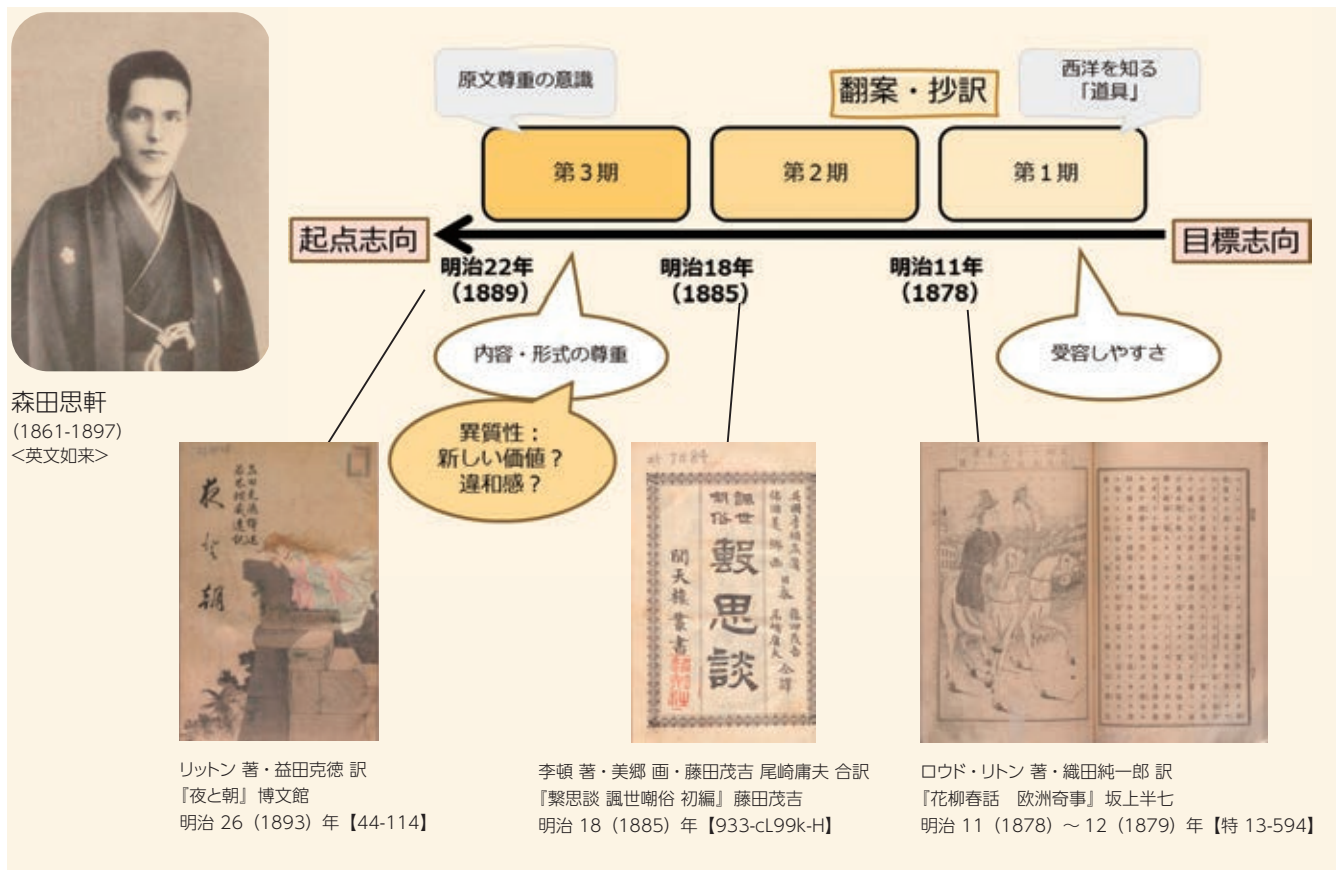
減らしたりしながら訳す「翻案」とか、長い原作の一部をとって訳す「抄訳」が行われていました。今回の展示会で展示されたような辞書類も十分でないような時代ですから、どんどん訳しましょう、ちよつと間違つていてもいいでしょうというのが当然だったのかなと思います。それが落ちて着いて慣れてきたところで原文尊重の意識が明治20年頃から出てくる。

第1期の頃は、もし言うならば「目標志向」と言ってもいいのかもしれませんが。読みやすさ、受容しやすさが大事にされてきた。第3期になると起点テキストの内容や形式も大事にしようという「起点志向」も出てきた。

起点テキストに忠実で、一語一語の対応がしっかりとした高い逐語性をもった翻訳では「欧文脈」が発生します。これは欧文の表現構造を日本語の表現、文脈に直訳的に移入した語脈、文章脈です。例えば、主語や目的語の明示、無生物主語が動作主となる表現、句読法などですね。

文学翻訳者の言説

明治の文学翻訳者は社会的地位が高



かったので、発表をする場もたくさんあります。また、翻訳自体について語る「言説」も、たくさん残されています。今日

は何名かの言説を取り上げますが、彼らの地位の高さをうかがえる要素として、坪内逍遙という同時代の人が森田思軒、森鷗外、二葉亭四迷をあげて、「三如来」と呼んでいて面白いので紹介します。森田思軒は英語からの翻訳、森鷗外はドイツ語、二葉亭四迷はロシア語と、それぞれの言語の翻訳の大家ということで、尊敬され、如來にたとえられるような人でした。

目標志向の方が強く表れていると思われる坪内逍遙の言説を紹介します。逍遙がシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』を訳した『自由太刀余波鋭鋒』の「附言」です。

今此国の人の爲めにわざと院本体に訳せしかば、原本と比べ見ば或は不都合の廉多かるべし（中略）原本の意は成るべく失はざらんを力むるといへども

「院本体」とは歌舞伎や浄瑠璃の脚本のことです。日本の人が馴染みのある形式で訳しているので読みやすい、ということになります。ただ、「原本の意は成

るべく失はざらんを力むる」と原著を大事にしようという気持ちもあることが分かります。

続いて、起点志向がありながらも、異質性の方も大事にしている人を紹介します。二葉亭四迷です。ツルゲーネフの『あひゞき』や『めぐりあひ』の翻訳者としても有名ですが、「余が翻譯の標準」では印象深いことを言っています。

原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つといふ風にして、原文の調子に移さうとした

森鷗外も次のようなことを言っています。

独逸語の「お前」に当る言葉なのだが、原作には子供に、その父親を呼ぶに此の「お前」を以てしてある。是を翻訳する場合日本の社会状態から言つて、父親は当然子供に対して「お前」と呼ぶ事になつてゐる。然るに、その正反對な事を子供に言はせると読者に取つて受取り難くはなからうか。此処に翻案の必要が生じてくる。

——『即興詩人』時代と現時の翻譯



二葉亭四迷
(1864-1909)
<魯文如來>

四迷はいかにして訳したか
——『あひゞき』より

「自分はたちどまつた……心細く成つて来た、眼に遮る物象はサツパリとはしてあれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてたうちにも、どうやらまじかになつた冬のすさまじさが見透かされるやうに思はれて。」

ロシア語の原文を訳文と見比べると「」と「」の数が揃っていることが分かります。

«Я остановился... Мне стало грустно; сквозь невеселю, хотя свежую улыбку, уявляющей природы, казалось, прокрадывался унылый страх недалекой зимы.»



森鷗外
(1862-1922)
<独文如來>



坪内逍遙
(1859-1935)

逍遙はいかにして訳したか
——『自由太刀余波鋭鋒』より

「羅馬の警官浮羅比彌須、摩羅々須もるとも足早に、進み寄つて立塞がり（浮）ヤアヤア町人共、何用あつて職を休み妄に徘徊致し居るぞ、キリキリ自宅へ歸りをらう、祭日祝日にもあることか、職人の身分にありながら、職を務めず遊びあるくは、甚だ以て不届至極、早く宅へ立戻り、各々職業を勉勵いたせ」



沙士比阿著・坪内逍遙 訳『自由太刀余波鋭鋒』
東洋館 明治 17 (1884) 年【特 13-579】

ドイツ語の *du* は二人称で「お前」に当

たる言葉ですが、お父さんが子どもに言うのはいいですが、子どもがお父さんに言うていたら変なので、日本語では違う訳し方をしなければいけない、そこで翻案の必要が生じると言っています。でも最後のところで「自分も此の手加減はしてゐるが、併しなるだけ原文の通りに、辞句の配列なども余り変更をしない考へ」と、起点志向であると考えられることも言っています。

今紹介した人たちは、目標志向と言いがらも起点テキストも大事なんだ、あるいは、起点志向を前面に出しながらも読みやすさが大事なんだとも言っています。グラデーションでこの二つの志向性はつながっているというふう考えられます。

森田思軒——翻訳の理論と実践

森田思軒は新聞記者でありジャーナリストです。翻訳王とも呼ばれていた人で、エッセイなどに翻訳に関する言説をたくさん残しています。

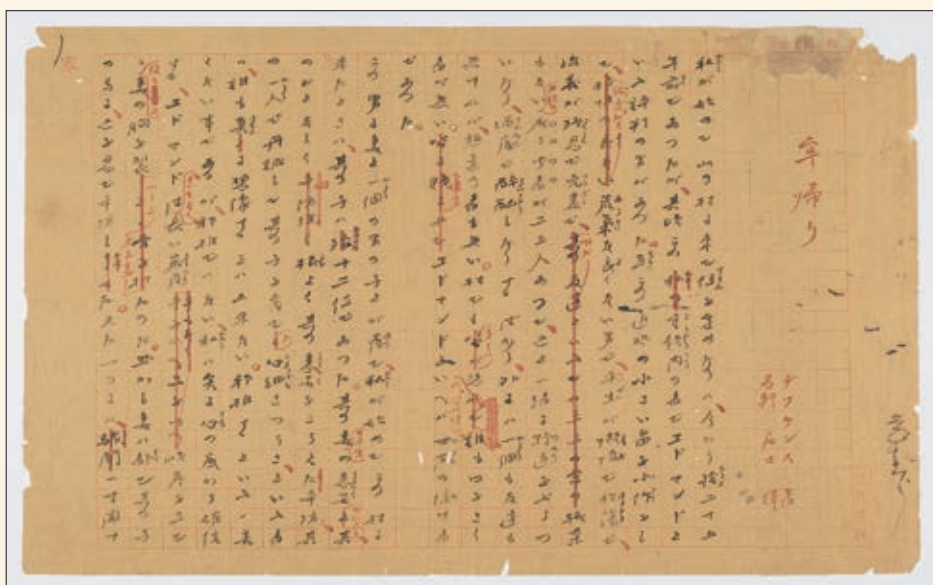
日本の文章についての彼の講演を基にした文章「日本文章の将来」で、漢字を引き続き使うのがいい、そのうえで、「造句措辞（エキस्पレーション）」は西洋の文体

を真似する「直譯の文体」がいいと言っています。

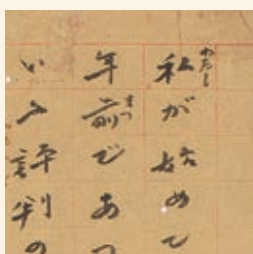
それから「翻訳の心得」というエッセイでは、翻訳の心得が第一から第四まで書いてある部分があるんですが、その第二の心得では起点テキストの表現を活かす必要はあるけれども、すべての起点テキストの語に対してそういう態度をとる必要はないとも言っています。

少しだけ思軒さんの『牢帰り』という作品を見てみましょう。原著はチャールズ・ディケンズ (Charles John Huffam Dickens) の *The posthumous papers of the Pickwick club* という作品です。

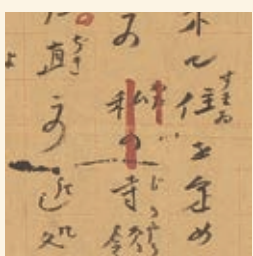
欧文脈が現れているところを見たいと思います (a)。冒頭が「私が」で始まっています。起点テキストは *When I first settled in this village*、で「*I*」が主語なんです。そこをきちんと「私が」と明示して始めています。当たり前と思うかもしれませんが、なくとも成立するのが日本語です。この箇所もちょっと注目してみましょう (b)。「私の」に取り消し線が入っています。元々の英語を見ると、*my parishioners*、というように、*my*、という言葉が入っているの、「私の」と書いたわけなんです。が、ちよつとくだいなと思っただと思いません。



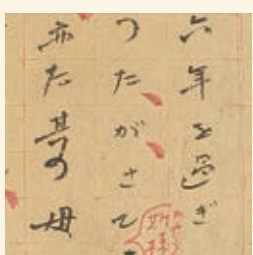
森田思軒「草稿： Dickens 著『牢帰り』」（個人蔵 笠岡市教育委員会管理）
（掲載画像提供「国文学研究資料館 近代書誌・近代画像データベース」）



(a)



(b)



(c)

句読法も見てみましょう(c)。「若者になった、が」とこういう読点の入れ方をしたら直したくなるんじゃないかと思いますが、原文と対照していくと、二葉亭四迷じゃないですけど、ピリオドやカンマなど句読点の場所を意識して再現しようとしていることが分かります。句読点は明治の人にとつて新しいもので使い慣れていないので、変な使い方をしているわけです。

其の子は強壯な、立派な一人まへの若者になつた、が、さて斯様に子どもの身体を大きくし、四肢を伸ばした

——『家庭雑誌』(83) 家庭雑誌社
明治29(1896)年8月【雑50・1】

さきほど二つの志向性をお示しして、目標志向も起点志向も見えますね、と言いました。実際に訳すときにも、二つの志向のなかで揺れ動きながら修正していったということが確認できます。

なぜ、いかに翻訳していたか

文学翻訳者の目的・役割として、今回の展示会のタイトル「知識を世界に求めて」に象徴されるように「知識」というのが大

事です。専門分野の情報とか技術、政治の仕組み、道徳などに加え、国語・言語に関する情報を特に西洋の先進国に求めています。先進国の言語を優れているものと捉え、その影響によって日本語の変容を狙っていたのではないかと思います。

翻訳はただある言語を別の言語に置き換えるだけの行為ではなく、コミュニケーションです。訳出先の言語に影響を与えたり、国語の成立にも寄与するような力をもっています。特に明治期は日本の社会が大きく変わっていたため、翻訳が大きな力をもっていました。それ以外の時代・地域であっても、ただ言語を置き換えるだけではない翻訳の要素があります。翻訳は残ります。140年前の明治の翻訳の様子も現代の我々が観察できるというのは翻訳の面白いところでもあり、残ってしまうという点では、ちよつと怖いところでもあるかもしれません。

国立国会図書館をはじめいろいろな機関が、デジタルでも見られる資料を提供してくださっていますので、皆さんもそういったものを活用して、ぜひ翻訳について社会全体で知識を深めていけたらいいなと思っています。



第4章第4節「原文尊重を目指して」・第5節「口語体による翻訳へ」の展示の様子

知識を世界に求めて

翻訳文学の歩み5

口語体による翻訳へ

知識を世界に求めて

翻訳文学の歩み3

純文学の翻訳の始まり

知識を世界に求めて

江戸後期の中国白話小説の受容
—「水滸伝」を中心に—

翻訳文学の歩み1

知識を世界に求めて

山のあるたの交連

「幸」はひとりのいり

翻訳詩集

知識を世界に求めて

翻訳文学の歩み4

原文尊重を目指して

知識を世界に求めて

明治初期の翻訳文学
—西洋を知る「道具」として—

翻訳文学の歩み2



展示資料と解説をご覧いただけるページをリサーチ・ナビで公開しています(9ページ参照)。
第4章「翻訳文学の歩み」は6つのページで40点ほどの資料と解説をご覧いただけます。

<https://rnavi.ndl.go.jp/jp/gallery/exhibit2022.html>



国際子ども図書館では、4月23日の「子ども読書の日」にちなんで、各界の著名人に、子ども時代の読書体験や出会った本にまつわるエピソード、読書の魅力について講演していただくことにより、子どもの読書活動への関心と理解を深める機会としています。

令和4年度は、国際子ども図書館の建築に関わった建築家の安藤忠雄氏に、人生に影響を与えた本の思い出や生きていく上での力となる読書、子どもたちに本との出会いを提供する意義などについてオンライン講演で語っていただきました(令和4年4月22日～8月31日配信)。この記事では、講演の概要を紹介します。(文責 本誌編集担当)



国際子ども図書館 前景

安藤 忠雄 氏

大阪生まれ。独学で建築を学び、1969年に安藤忠雄建築研究所を設立。代表作に「六甲の集合住宅」「光の教会」「ビューリッツァー美術館」「ブルス・ドゥ・コムルス」「こども本の森 中之島」など。日本建築学会賞、フランス建築アカデミーゴールドメダル、05年UIA(国際建築家連合)ゴールドメダルなどを受賞。イェール、コロンビア、ハーバード大学の客員教授歴任。97年より東京大学教授、03年より名誉教授。

冒頭、安藤氏はサミュエル・ウルマンの著名な詩「青春」から着想を得た「青いリンゴ」の話から、この講演を始められています。生きる力は好奇心と体力であり、「何歳でも目標がある限り青春だと思う」と述べました。

安藤氏が建築の設計に興味を持ったのは中学2年生の時に、平屋建ての自宅を二階建てに改造した時に働いていた近所の大工さんを見て、楽しそうに仕事をしている姿に魅せられたようです。

ただ、建築に心惹かれたものの、身近に書物や絵画、音楽など文化的なものはなく、長屋の隣に貸本屋があるのみでした。貸本屋では『野口英世』や手塚治虫の『鉄腕アトム』などを読みましたが、難しい文学書は置かれていなかったということです。

大学に行くのは色々な事情から諦め、自分でアルバイトをしながら大量の本を読み続けたそうです。10代の終わりには具体美術協会の活動やアメリカのモダンジャズに触れ、大きな衝撃を受け、また同時に、人に勧められ、西田幾多郎や和辻哲郎などの本を読むうち、本の中には深く、大きな世界が待っていることを知ります。特に、夏目漱石の『坊ちゃん』は面白く、もっと早く読めばよかったと後悔するほどだったといいます。

奈良の東大寺など多くの寺院をはじめとした歴史的建造物を追いかける中で、本の世界



夏目漱石 坊ちゃん

夏目漱石 著『坊ちゃん』
(新潮文庫刊)



青いリンゴ 安藤忠雄建築研究所 提供



安藤 忠雄 氏 photo by 関野欣次



こども本の森 中之島 安藤忠雄建築研究所 提供



光の教会 photo by 松岡満男

の深さ、豊かさを感じるようになりました。24歳の時には、10か月かけて世界を回ったそうです。当時、ちようドル・コルビュジェに興味があり、マルセイユにあるユニテという集合住宅を見て、これを作り上げた人や国に感動を覚えたといいます。

一人一人が自分の職業を通して社会に何ができるかを考えれば、より良い世界になるのではないかという考えに至ります。自身も、建築を通して社会に何が還元できるか、常に考え続けてきたそうです。

安藤氏が近年、大阪の中之島に子どものための図書館を作ったのも、アメリカの鉄鋼王だったカーネギーの、自身が社会から得た利益をどう社会に還元し、生きていくかという考えに共感し、同様に自分のお金で図書館を作りたいとの思いからだったとのこと。

さらに、安藤氏は、子どもの図書館の建築を通じて、一人でも多くの子どもたちが創造力を育み、自ら考え、行動できるような人間になって、世界へ羽ばたいてほしいと願っています。

安藤氏は自分が中学2年生の時に長屋の改造で目にしたような上から入ってくる光の美しさ、力強さを、設計を通じて少しでも伝えたいと話しています。そして、「これからできれば青いリンゴのまままで頑張り続けたい。」と結んでいます。

私が所属する国際子ども図書館企画協力課協力係では、主に図書館関係者を対象にした研修や連携協力を、子どもの本や子どもと読書に関する情報発信などを担当しています。具体的には、コロナ禍で開催形式を変化させながらも毎年実施している児童文学連続講座や、令和2年度に開館20周年記念コンテンツとして始まった「SDGsと子どもの本」いま、図書館にできること」などがあります。

私は今年度異動してきたばかりで、自分自身も日々子どもの本のことを勉強中の身なのですが、子どもの本に関わるようになって改めて感じたことがあります。それは、子どもの本は大人が描き、作り、選び、読者である子どもに届けられていくということ。

当然と言えば当然なのですが、読者層ではない人が作るという点は、大人の本と大きく異なるどころかなと感じています。とすると、子どもたちがすばらしい本を手取るためには、やはり周りの大人たちがどんな本があるのかよく知っていることがとても大切です。そう考えると、図書館司書や学校の先生といった、子どもと本をつなぐ役目を果たしている大人の方々に向けて情報をお届けしていく意義は大

きなものだと感じます。

そこで今回は、今どんな本が注目されているのか、自分自身の勉強にも大変役立っている「子どもと本に関するニュース」をご紹介したいと思います。「子どもと本に関するニュース」は国際子ども図書館のホームページで配信している、国内外の児童文学賞や、子どもの本に関わる団体の取り組みなどを紹介するニュース記事で、執筆担当者が用意した文案を上司がチェックしながら作成しています。海外の児童文学賞などのニュースも、どう訳せば作品の魅力が伝わりやすいかを係であれこれ考えながら作成していますので、ぜひご覧ください。ご紹介している作品や作家は有名な賞を受賞したものが中心です。で、ちょっと手前味噌ですが、子どもの本に関する最近の状況を知るにはよいツールなのではないかと思えます。

私たちが発信する情報が、どこかの誰かの「これ、子どもたちに薦めてみよう！」につながると思います。と思いつつ、今日も記事案とにらめっこしています。

お、この作品がまた受賞してるな、ふむふむ。
(企画協力課協力係 ヒーローズさんが好きでした)

大人にこそ
伝えたい



ニュース作成中の筆者



開館20周年記念コンテンツの
ロゴマーク。
ニュースでは、国連のSDG
Book Clubのブックリストもご
紹介しています。

デジタルコレクション、 リニューアル

その機能を探る

令和4（2022）年12月21日、国立国会図書館デジタルコレクション（以下、「デジタルコレクション」）をリニューアルしました。

デジタルコレクションとは、当館で収集・保存しているデジタル資料を検索・閲覧できるサービスです。図書や雑誌など当館や他機関が所蔵資料を用いてデジタル化した資料約311万点と、インターネット上で公開されている電子書籍・電子雑誌や博士論文を当館が収集した資料約155万点が収められています（数値は令和4年12月時点）。

今回はリニューアルにより便利になったデジタルコレクションの機能について、ご紹介します。

（関西館電子図書館課）



デジタルコレクショントップページ

全文検索対象のデジタル化資料が大幅に増えました!

全文検索とは、資料の本文テキストを対象とする検索のことです。これにより、キーワードを、タイトルや著者などの書誌情報だけでなく、資料の本文に含むものまで見つけられます。従来のデジタルコレクションでも一部のデジタル化資料についてはこの全文検索が可能でしたが、今回その点数が大幅に増加し、約 247 万点が検索対象になりました。今回全文検索可能になったのは、令和 2 年 12 月までにデジタルコレクションに登録された、図書や雑誌などのデジタル化資料です。全文検索でヒットした箇所は検索結果一覧に表示され、クリックすれば該当のコマに直接移動できます。



例えば、「ミス・ワカナ」をキーワードに全文検索をかけると、



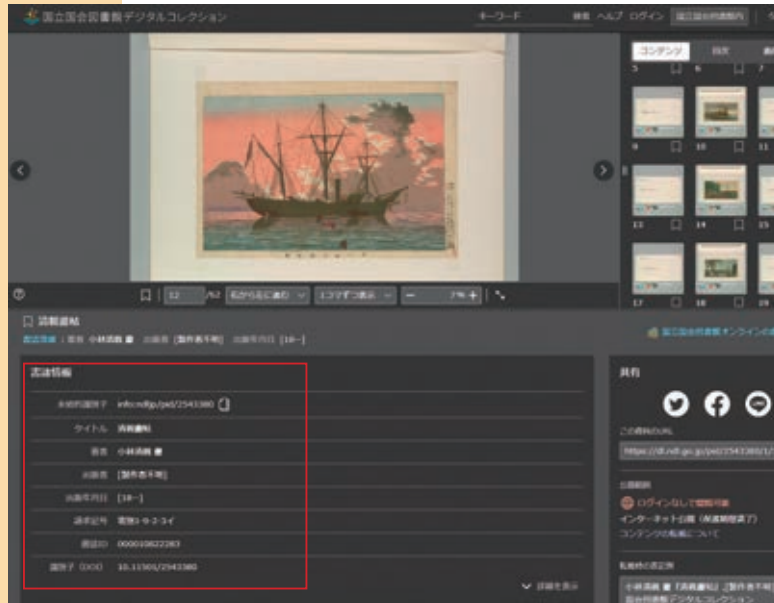
『レコード音楽技芸家銘鑑 昭和 15 年版』（レコード世界社、昭和 15 年）の 163 コマ目に記載があることがわかります。

コマ数を示す左端の「163」をクリックすれば、該当ページの閲覧画面に遷移します。左ページに確かに「ミス・ワカナ」の項目があります。

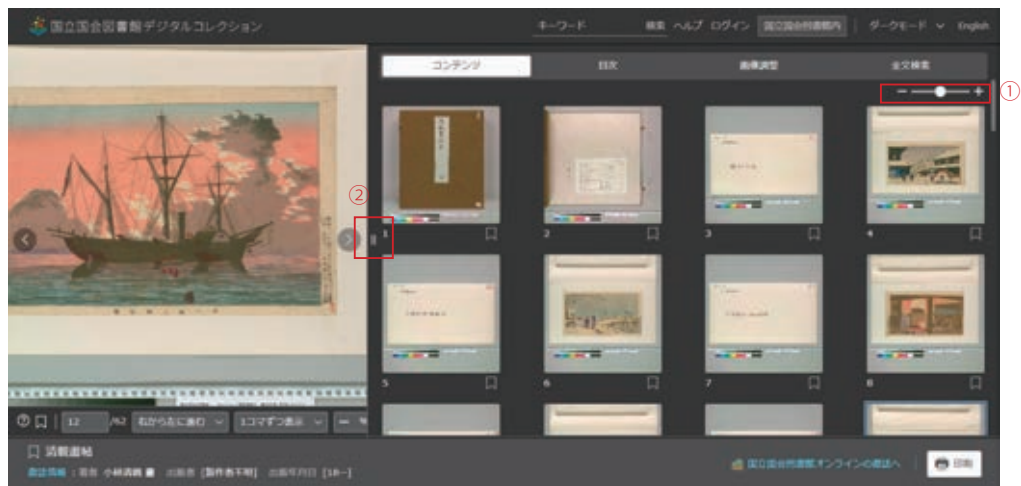


閲覧画面を改善しました!

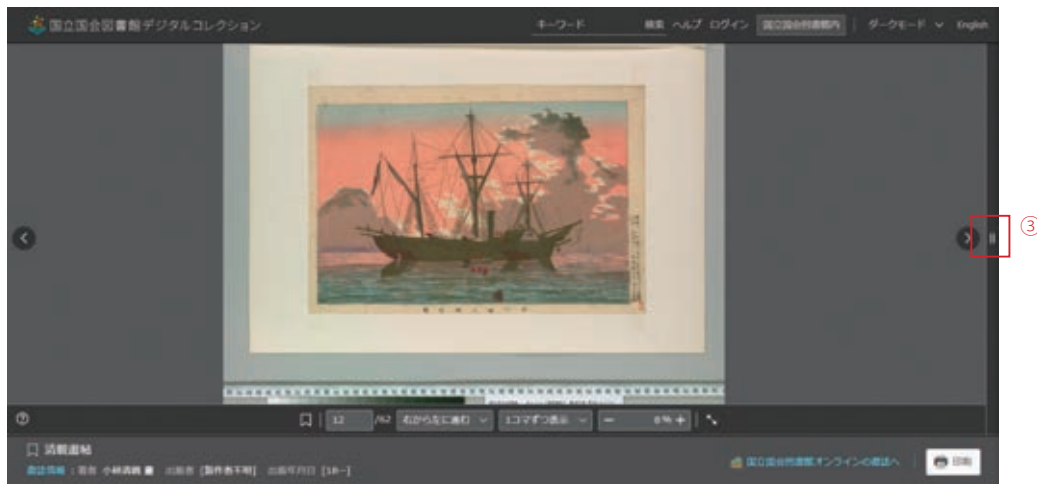
これまでコンテンツ画像の左側に表示されていた書誌情報を下に移動させ、右側のタブの幅を可変にすることで、コンテンツ表示エリアの大きさを柔軟に変えられるようになりました。右側のタブには、閲覧している資料全コマのサムネイル表示、目次表示、画像調整、全文検索の機能があります。資料のコマ画像をサムネイルとして表示するコンテンツタブでは、上部のプラス/マイナスのつまみ(①)でサムネイルの大きさを変え、プラスに調整すると、各コマのサムネイルが大きく表示され、閲覧したいページを選びやすくなります。また、コンテンツタブ左側中央にある縦二重線(②)を左方向に引っ張りタブの幅を広げると、一度に表示されるサムネイルの数を増やすことができます。反対にタブの幅を狭くすると(③)、コンテンツのみを表示することができます。



書誌情報がコンテンツの下に表示されています。



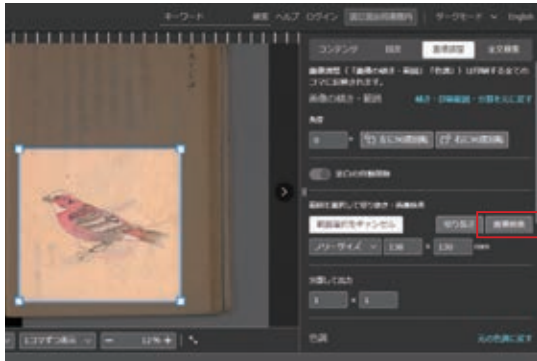
タブの幅を広げると、表示するサムネイルの数を増やせます。



タブの表示する幅を狭くすると、コンテンツだけを表示できます。

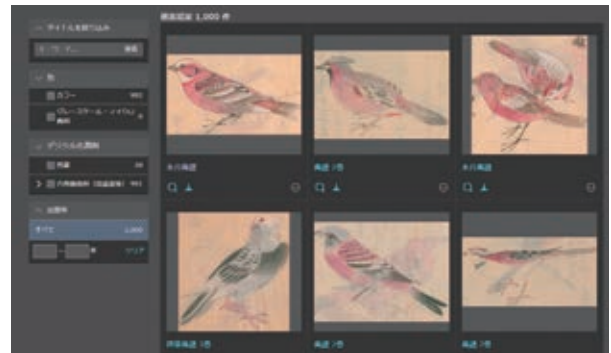
画像検索機能を追加しました!

トップページの画像検索欄や閲覧画面の画像検索ボタンを使うと……



新たに画像検索ができるようになりました。画像検索とは、デジタルコレクション収録資料からトリミングした画像や、お手持ちの任意の画像をもとに、それらに類似する図版（図、挿絵、写真等）を検索する機能です。検索対象となるのは、閲覧画面の公開範囲欄に「インターネット公開（保護期間満了）」と記載されている図書、古典籍資料です。

トップページの画像検索欄や、閲覧画面の画像調整タブ・「範囲を選択して切り抜き・画像検索」欄の「範囲を選択」をクリックして表示される画像検索ボタンから検索できます。検索に使用する画像によっては、思いがけない資料を発見できるかもしれません。



似ている図版が見つかりました!



1度のログインで3つのサイト全てでログイン状態になります。

シングルサインオンを実装しました!

国立国会図書館が提供している web サービス「国立国会図書館オンライン」（以下、「NDL オンライン」）、「国立国会図書館サーチ」、「国立国会図書館デジタルコレクション」においてシングルサインオンが実現し、いずれかのサイトでログインすれば、3つのサイト全てをログイン状態で利用できるようになりました。

例えば、デジタルコレクションで見つけた資料の遠隔複写を申し込むには、これまではNDL オンラインに移動し、あらためてログインして申し込む必要がありましたが、リニューアル後は既にデジタルコレクションにログインしていれば、NDL オンラインに移動しても再度ログインする必要はなく、そのままスムーズにお申込みいただけます。

今回ご紹介した機能の他にも、スマートフォン対応など様々な改善を行いました。デジタルコレクションには図書や雑誌、博士論文、録音・映像資料など幅広い種類の資料が集められています。皆さんの探している資料も、実はデジタルコレクションにあるかもしれません。新しくなったデジタルコレクションをぜひご利用ください!

本屋に

ない

本



日本の素朴絵

ゆるい、かわいい、たのしい美術
特別展

三井記念美術館・龍谷大学龍谷ミュージアム・NHKプロモーション 編 NHKプロモーション刊
2019.7 211p; 22cm
<請求記号 KC16-M394>

絵心がある人に生まれ変われたら。幼いころ、絵が得意な友人とお絵描きをするたびにそう思っていた私は、い

つしか美術展を敬遠するようになっていた。美術への苦手意識を拭うことができず、美術展は「絵心のある人が名画を楽しむ高尚なところ」だと決めてかかっていたのだ。

そんな私でも純粹に楽しむことができたのが、今回ご紹介する『日本の素朴絵』だ。本書は、2019年に三井記念美術館と龍谷大学龍谷ミュージアムで開催された特別展の図録である。聞きなれないが、なんとなく想像できる気もする「素朴絵」という語。本書では「ゆるくとぼけた味わいのある表

現で描かれた」作品のこととし、絵画を中心に118点を紹介している。

素朴絵をテーマにした展覧会は本邦初とのことだが、本書の最大の魅力は何と言っても作品のゆるさにある。柔らかな筆致でユーモラスに描かれた作品ばかりで、見ていて脱力してしまうのだ。デフォルメされて滑稽に描かれた七福神、どこかコミカルな地獄絵などは、愛嬌たっぷりで見ると飽きさせない。子どもの落書きのような作品の数々に、このレベルなら私も描けるのでは、などと思ってしまう。また、素人の作品と、プロの絵師の作品の双方を取り上げている点も特筆すべきだろう。室町時代の縁起絵巻や

曼荼羅などは、庶民への布教のため、作画技法を学んだことのない無名の絵師が描いたものだという。素人なりに懸命に描いたのだと思うと、稚拙な表現にも親近感がわくが、素人の作品が今日まで残り、著名な画家の作品とともに展示されたことには驚かされる。

一方、江戸時代半ばになると、プロの絵師があえて素朴な絵を描くようになったという。庶民の文化が花開き、素朴絵も人気を博すようになったのだ。伊藤若冲は、郷土玩具の土人形である伏見人形を好んで描いたことで知られる。肌や着衣はベタ塗り、眉とまぶたは細い一本の線で、目と口は点で表された、簡略で大らかな造形だ。若

冲といえど緻密で鮮やかな色彩を思い浮かべるが、技巧にこだわらず、好きなものを好きなように描くことで、かえって味わいが深まるのかもしれない。

日本には庶民的な絵画も多いこと、またその一つ一つが個性的で素朴ゆえの魅力にあふれていることが分かり、初めて美術を身近に感じることができた。幼い私が描いた絵にも、拙いなりに趣があったのだろうかと思うと、心が温かくなってくる。「なんとなくくたのしんでや」と図解のページにあるとおり、本書は肩肘張らずに楽しめる一冊となっている。ゆるい絵の数々、堪能していただきたい。(塩畑里紗)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。



ルクセンブルク国立図書館の閲覧エリア全景
© Bibliothèque nationale du Luxembourg

世界図書館紀行

ルクセンブルク国立図書館

中村 絢子



はじめに
緑豊かなヨーロッパの小国、ルクセンブルク。鉄鋼の国から金融の国へと変貌を遂げ、一人当たりGDPや最低賃金の高さで世界トップレベルを誇る。近年では、公共交通機関の無料化や宇宙政策への積極的な取組でも知られ、文教政策に目を向ければ、分野横断的なユニークな研究センターを擁する同国唯一の公立大学・ルクセンブルク大学が国内外の研究者・学生を惹きつけている。本稿は、しなやかな強さを持つこの国の国立図書館 (Bibliothèque nationale du Luxembourg : BNL) を、当館在外研究員として同大学議学会学修士課程に在籍中の筆者が探訪した記録である。

Bibliothèque nationale du Luxembourg



(上) 中央駅とトラム
(下) 左側がかつてのルクセンブルク国立図書館 (p.26
コラム参照)。右奥はノートルダム大聖堂

ルクセンブルク国立図書館の外観

1. BnL概要

都心に置かれた「知のインフラ」

ルクセンブルクとえば、1994年に世界文化遺産に登録された美しい旧市街（ルクセンブルク市・その古い街並みと要塞群）が有名であるが、その北東・キルシュベルク地区には大型商業施設やスポーツ施設、EU司法裁判所や欧州投資銀行などが立ち並び、同国の都心部が形成されている。読書・知識・文化を奨励するという同国の方針に基づき、BnLは潜在的な利用者が多いこの都心部に置かれ、「知のインフラ」としての役割を担っている。すぐ目の前にはトラム（路面電車）の停留所があり、旧市街からは15分、ルクセンブルク中央駅からは20分程度でアクセスできる。

2つの側面

BnLは、遺産図書館と学術研究図書館という2つの側面を持っている。

まず、遺産図書館として、国内で印刷された紙及び電子資料をその出版者又は作成者が図書館に納入する納本制度（1958年導入）に基づき収集するとともに、ルクセ

ンブルク人が同国外で出版した資料や、同国について書かれた資料も購入や寄贈により収集し、世界で唯一のルクセンブルクコレクション「Luxemburgensia」を構築している。納本制度に基づく収集対象には、図書、パンフレット、定期刊行物、ポスター、カレンダー、絵葉書、版画、舞台・コンサート等のプログラム、地形図、都市図、楽譜、舞踏譜、点字出版物、博士論文等が含まれる。納本点数は資料の種類ごとに決まっていますが、例えば図書の場合は4点であるが、納本によりいかなる支払いも発生しないことが定められている^①。

他方、学術研究図書館として、国外で出版されたあらゆる分野の資料を収集・所蔵している。BnLが所蔵する図書、定期刊行物などの出版物は約180万点であるところ、その約4分の3をこれらの国外出版物が占めている。主に収集対象となるのは、ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語及び英語の資料であるが、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語やロシア語の資料も所蔵する。



ルクセンブルク国立図書館の誕生から新館建設まで

BnLの起源は1798年に遡る。ルクセンブルクがフランス革命軍の侵攻により同国に併合され、その一地方(Département des forêts)となっていた時代である。新館建設に関する立法資料²によれば、フランス当局がこの地方に設置した学校(École centrale)の図書館に、革命軍の侵攻により廃止されていた各地の神学校や修道院の図書館の蔵書が集められたのがBnLのはじまりとされる(このとき集められた書物には古いものでは7世紀の資料も含まれ、BnLの貴重なコレクションの一部を成している)。その後、複数の図書館機能を吸収し、1899年には国立図書館と呼ばれるようになった。

ルクセンブルクの百科事典的な機能を果たす図書館として、常に国内出版物を上回る点数の国外出版物を収集・所蔵してきたBnLではあるが、その機能を十分に果たすための広さの確保にいつも頭を悩ませてきた。BnLは長きに

わたり旧市街のノートルダム大聖堂に隣接した学校の一角に置かれていたが、ドイツの占領下にあった1942年、同国の一地方図書館としての役割とともに、市内中心部を走るロワイヤル通り沿いに専用の建物を与えられた。しかし、戦後この建物も手狭となり、所蔵資料は複数の保管場所に分散配置される状態となった。1973年以降は、前述の学校の移転に伴って空いた建物を改修して図書館サービスを提供していたが、資料保存や閲覧のための十分かつ適切なスペースの不足という問題が早くも1980年代には顕在化し、BnL拡張工事の検討が始まった。大聖堂の前庭を地下6階分掘削するという当初案が却下されてからいくつかの場所が新館の建設候補地に挙げられたが、土地代が掛かりすぎる、アクセスが悪い、などの理由により候補地選びは難航し、現在の場所での新館建設が発表されたのは2010年になってからであった。

(右) 閲覧エリア 吹き抜け

(下) 天窓



比較的低く落ち着いた色味の館内でひととき目を引くのは、1階の特別閲覧室である。写本やインキュナブラ(活版印刷技術の黎明期である15世紀に金属活字により印刷されたもの)などの貴重資料を閲覧する際に利用される部屋である。貴重

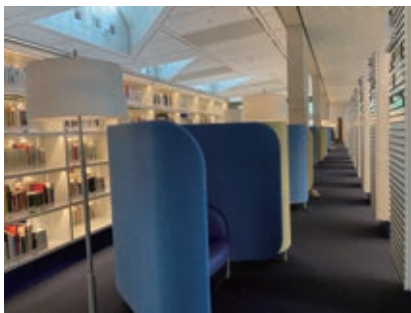
空間
2019年9月に落成したばかりのBnLの新館は、開放性とフレキシビリティをコンセプトとして建てられた。館内は、たくさんガラス窓からやわらかな日差しが降り注ぐ快適な公共空間となっているが、新館建設に至るまでには長い道のりがあった(上コラム参照)。

新しい国立図書館の建設に関する法律案は2013年4月に可決され、2014年6月に着工、5年3か月間の工事を経て完成した建物に³、それまで7か所に分散していた資料が集められた。静謐な空間を保つため、閲覧エリアの壁には吸音機能を施した白いレンガとオーク材、床には青い絨毯が使用されている。470の閲覧席は、エリアごとにテーマ性を感じるほどバリエーションがある。

2. 開放的でフレキシブルな図書館を目指して
多様な閲覧席が設けられた快適な空間



特別閲覧室（上）とその前に置かれたミュージアムケース（左）



閲覧席のバリエーションの豊富さはBnLの特徴の一つである。バンカーズライトのような卓上照明が置かれた席は勉強や読書に最適であるし、書架と書架の間の狭い通路に並んだパーティション付きのソファに座れば、本の世界に一人どっぷり浸ることができる。有機的なフォルムのラウンジチェアは、座ってくつろぐことができるだけでなく、そこにあるというだけで感性を刺激する効果がある（気がする）。また、ベビーベッドやおもちゃが備え付けられたファミリールームもあり、小さな子どもを遊ばせながら読書や研究ができる環境が整っている。

（上から時計回りに）0-1階閲覧エリア、ラウンジチェア、ファミリールーム、パーティション付きソファ

環境への配慮
BnLに様々なタイプの閲覧席が用意されていることには、誰もが自分の理想とする場所を見つけられるようにという図書館側の思いが込められているのであるが、エネルギー効率に配慮しながら個々の利用者に快適な環境を提供することを狙ったものでもある。閲覧エリアはエントランスから大きな吹き抜けとなっており、北向きの天窓から入る自然光で館内の明るさを確保し、照明を補助的に用いることで、電力消費を抑えている。空調設備は各書架の下に

資料が持つ遺産的価値を象徴するため、壁の色には鮮やかな赤が選ばれた。規則正しく配置された照明が壁に施された金色のダマスク模様を映し出し、この部屋の特別な雰囲気はガラス越しに部屋の外にまで放たれている。特別閲覧室の前に置かれたミュージアムケースには、オーストリア大公妃マリア・テレジア（在位1740〜1780）やオランダ国王ウィレム1世（在位1815〜1840）らの小さな肖像画がずらりと並び、ルクセンブルクがヨーロッパの覇権争いの過程で様々な国の統治下にあった歴史を静かに伝えている。



2階閲覧エリア



(上) 荷物や上着はロッカーへ入れることになる。
(下) ルクセンブルクコレクションが置かれた部屋



欧州統合の歴史などを学べるシェンゲンの施設 Musée européen Schengen から、モーゼル川と対岸のドイツを臨む。

埋め込まれており、そこから吹き出す新鮮な空気が閲覧エリアで徐々に温められて上昇し、天井裏から排出されるように設計されている。白色の金属柱は、それ自体が夜間の冷気をまとい、日中の室温上昇を和らげる効果を持つそうだ。

3. 読書を通じて知識社会の発展を支える

研究も、生涯学習も、余暇も

開放性とフレキシビリティは、BnLの図書館サービスにも現れている。先ほど少し触れた、バリエーション豊かな閲覧席は、図書館が読書を通じて学び、考え、休息し、気晴らしをする場所であるということ象徴したものなのだ⁵⁾。開架資料を閲覧するだけなら、利用登録はいらない。もちろん、鞆や傘、ヘルメット、コート類等を持ち込むことはできないので、エントランスのロッカーに預ける必要があるが、あとは、警備員さんに挨拶するだけで、気持ちよく閲覧エリアに入ることができる。

一方で、資料の利用を一定程度コントロールするため、開架資料の閲覧以外のサービスについては利用登録を課している。登録自体は全ての人に開かれており、サービスごとにその対象者が定められている。例

えば、BnLの所蔵資料は、ルクセンブルクコレクションを除いて館外貸出が認められているが、これは「ルクセンブルク又はその国境地域に居住している14歳以上の者」と「ルクセンブルク政府が認可した高等教育機関に所属する学生」のみが利用できるサービスである⁶⁾。

国境地域に住む人がルクセンブルク在住者と同じように扱われている点にすこし注意が向くが、移動の自由があるEU域内にあっても、とりわけ国境を接するドイツ、フランス及びベルギーとルクセンブルクとの往来は想像以上にシームレスなようである。そのことは、欧州における国境検問の廃止がこれらの国にオランダを加えた5か国間で始まったということからも窺い知れる。ルクセンブルク南東部のシェンゲンで、ドイツ・フランスとの国境沿いのモーゼル川にかかる橋の上を車が頻繁に行き交う様子を見て、国境が県境のような、不思議な感覚に陥ったことが思い出される。

話を図書館サービスに戻すと、資料の館外貸出を行う点でBnLは比較的珍しい国立図書館かもしれない。ルクセンブルクコレクションはさすがに貸出対象外であるが、国外で出版される(しばしば高価な)専

2階の東側には音楽室があり、図書館に所蔵されている楽譜を見ながら備え付けのピアノを弾いたり、自分の楽器を持ち込んで演奏したりすることができる。また、その先のメディアテークと呼ばれるエリアには、ジャンル別に整理されたCDやDVDが並んでおり、オーディオブースで鑑賞できるのみならず、例えば映画なら最大4点まで1週間、語学教材⁸は最大3点まで4週間借りられる。音楽室もオーディオブースも、音楽や映画を純粋に楽しむために利用することができ、予約はオンラインで完結する（もちろん利用料はかからない）。開放性とフレキシビリティというこの図書館の2大コンセプトを凝縮した図書館サービスと言えるだろう。

(右から時計回りに) 音楽室、オーディオブース、メディアテーク



門書を借りられるのはとても便利である。1度に借りることができる図書資料の上限は20点、貸出期間は4週間であり、これだけでも大盤振る舞いに思われるが、他の利用者から予約が入らなければ2回まで延長でき、借りてきた本を自宅で最長3か月程度も楽しめる。自動返却口があるので、開館時間以外でも資料を返すことができる。資料を破損・紛失した場合は、弁償するまで利用者アカウントが凍結され、貸出等のサービスを受けられなくなるが、そのような事例はこれまでに1件のみだという。ちなみに、ルクセンブルク大学図書館の図書貸出サービスは、学生・教職員の場合、貸出点数は無制限、期間はデフォルトで3か月（1回延長可）とやはり大盤振る舞いである。仮に読みたい本が貸出中であっても、3か月待たなければならぬ……などと落胆する必要はない。利用予約を入れれば、その時点から1週間後に返却期日が繰り上がる仕組みになっているからである。

登録利用者は他に、Eジャーナル等オンライン資料へのアクセス、複写機・スキャナーの利用⁹、閉架資料の閲覧が可能である。閉架資料を利用したい場合は、スマホ又はPCからオンライン蔵書目録に当たる¹⁰にログインして申し込む。申込をしてから閲覧できるようにするまで40分程度かかるが、閲覧準備ができたという連絡が来てから1週間は受付で保管してもらえらるため、あらかじめ申込をしておけば、来館した際にスムーズに資料を利用できる。探している資料が国内で入手できない場合は、国外の図書館からBnLを紹介して資料を借りたり、論文のコピーを送ってもらったりするサービスも用意されている（ただし、研究目的の利用に限られる。利用料は資料1点につき2ユーロ）。

図書館運営の効率性と利便性

図書館運営の効率化のため、資料にはICチップを貼付し、手作業による資料仕分けを可能な限り減らしている。資料の貸出手続もセルフサービスで、閲覧エリアに置かれた自動貸出機に本を置き、利用者カードをかざしてログインをすれば複数の本の貸出手続が一瞬で完了するため、利用者の時間の節約にも役立っている。

排架方法の工夫も興味深い。開架資料については、多くの図書館同様、利用者が資料を探しやすいようテーマごとに分類・排架されている。これに対して書庫内の閉架資料は、ス



3階閲覧エリア



(右) 複写もスキャンもセルフサービス
(左上) 開架資料。赤シールが付いているものは貸出不可
(左) 自動貸出機

ペースの有効活用と効率的な出納作業のため、本のサイズとコレクションごとに分類されたうえで、受入順に並べられており、資料の位置は原則として変わることがない。(そのため、BnLの資料にはまず所蔵順の通しコードが付され、開架資料には別途、デュイイ十進分類法に基づき、主題と著者を示すラベルが貼られている。)

資料保存という文脈では、エネルギー効率に配慮した図書館建築も注目される。書庫内を資料保存に適した環境(温度 18 ± 2 度、湿度 50 ± 5 %)に維持するのに必要なエネルギー消費を抑えるため、5層の書庫は高機能な断熱材で覆われた「箱の中の箱」となるよう建物の中心部に設計されている。また、地熱、太陽光、夜間の冷たい空気などを活用する設備を整えており、建物の冷却に必要なエネルギーは、完全に再生可能エネルギーにより賄われているという。

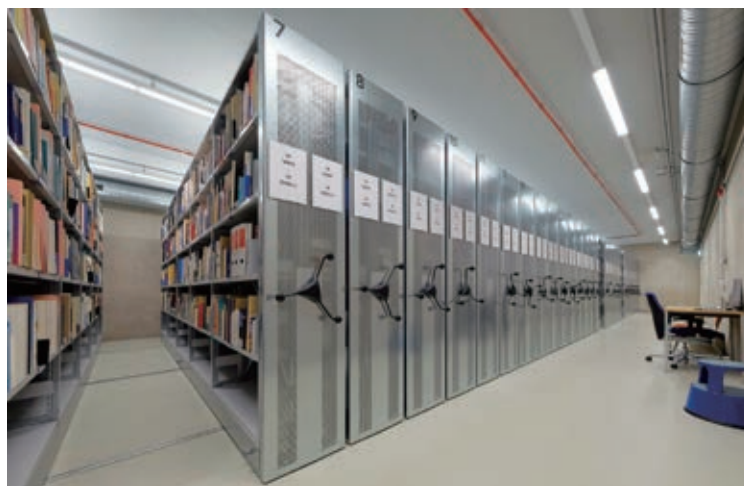
おわりに

ルクセンブルクの文化遺産を伝え、学術研究に資する使命を持つBnLは、長い年月をかけて、いつ訪れても居心地がよい図書館へと進化してきた。開放的な雰囲気と利用手

続の少なさは、ICチップを活用した資料管理と、自律した利用者で想定した合理的な図書館サービスにより実現されており、利便性の向上と職員の作業負担の軽減が同時にかなっている点に感服させられる。効率的な図書館運営のベースとなる施設を新たな拠点として得て、BnLは今後も質の高い書物へのアクセスを広く保障し、ルクセンブルクの知識社会の発展において中心的な役割を担い続けていくだろう。



カフェタイムは勉強の合間に休憩する若者で賑わうBNL'S CAFE。キャラットケーキが美味しい。



(左上) 資料仕分けの自動化 (右上) 館外に設置された資料の自動返却口
(下) 書庫 © Bibliothèque nationale du Luxembourg

色々な座席 © Bibliothèque nationale du Luxembourg

1 Règlement grand-ducal du 6 novembre 2009 relatif au dépôt légal (納本規則) ; *Commentaire des articles du règlement*. (納本規則逐条解説) BnL website <https://bnl.public.lu/content/dam/bnl/pictures/downloads/services_pro_depotlegal/Commentaire_des_articles_dpotelegal.pdf>

2 Projet de loi relatif à la construction d'une nouvelle Bibliothèque nationale à Luxembourg-Kirchberg, N° 6516 (2012-2013), déposé au 31 décembre 2012.

3 "Bibliothèque nationale du Luxembourg," dernière mise à jour 11 décembre 2019. Portail des Travaux publics (公共工事ポータル) website <<https://travaux.public.lu/fr/projets/projets-batiments/2014/bnl.html>>

4 同上

5 Ministère du Développement durable et des Infrastructures et Ministère de la Culture, "Visite de la nouvelle bibliothèque nationale à Luxembourg-Kirchberg," *Dossier de Presse*, 29 mars 2018. <<https://gouvernement.lu/dam-assets/documents/actualites/2018/03-mars/29-bnl-chantier-dossier.pdf>>

6 Règlement d'ordre intérieur et règlement du prêt (庁舎秩序規則・貸出規則), 30 mars 2022. BnL website <<https://bnl.public.lu/content/dam/bnl/pictures/downloads/reglements/reglement-interne-bnl-fr.pdf>>

7 A4 白黒コピー 1 頁当たり 10 セントユーロ、スキャン 1 頁当たり 2 セントユーロ (2022 年 10 月 1 日現在)。

8 1984 年の言語法により、ルクセンブルク語を国語とする一方で、行政・司法手続の使用言語としては、フランス語、ドイツ語又はルクセンブルク語と定められている。

9 Ministère du Développement durable et des Infrastructures et Ministère de la Culture, "1er coup de pelle de la nouvelle bibliothèque nationale

à Luxembourg-Kirchberg," *Dossier de presse*, 26 juin 2014. <https://bnl.public.lu/dam-assets/pictures/downloads/decouvrir_bnl_enbref/dossier-presse_nbnldef.pdf>

○参考文献

La Bibliothèque nationale du Luxembourg (BnL), *Rapport d'activité 2021, 2022*. <<https://bnl.public.lu/dam-assets/pictures/publications/rapportsannuels/07724-BNL-RAPPORT-ANNUEL-2021-web.pdf>> (年報)

BnL, *La Bibliothèque nationale du Luxembourg: Entrez et découvrez*, octobre 2021. (頒布用紹介冊子)

Administrations des Bâtiments publics en collaboration avec la BnL, *Bibliothèque nationale du Luxembourg - le nouveau bâtiment*, octobre 2019. <<https://bnl.public.lu/dam-assets/pictures/publications/pr%C3%A9sentation-bnl/ABP-BNL-Publication-low-res.pdf>> (図書館建築としての新館の小冊子)

La Bibliothèque nationale de Luxembourg, *La Bibliothèque nationale: un outil pour le développement de la société de la connaissance*, avril 2018. <<https://bnl.public.lu/dam-assets/pictures/downloads/06241-BNL-BROCH-STRATEGIE-VIEW-web.pdf>> (図書館サービスの紹介冊子)

La Bibliothèque nationale de Luxembourg, éd., *La Bibliothèque nationale de Luxembourg: son histoire, ses collections, ses services*, Luxembourg: Imprimerie Zierden, 1987; *idem*, Luxembourg: Imprimerie Centrale, 3e éd., 1994.

※URL最終アクセス日: 2022 年 12 月 12 日

※白地図の出典: 白地図専門店 <https://www.freemap.jp/free.html>

※特記のない限り、写真は筆者撮影

令和5年度国立国会図書館職員採用試験

令和5年度の職員採用試験を次のとおり実施します。

試験の概要 (詳細は試験案内またはホームページをご確認ください。)

種類	受験資格※1	受付期間※2	第1次試験日	会場
総合職試験	H1.4.2～H15.4.1生	R5.3.6 (月) 10時～ 3.23 (木) 17時	R5.4.29 (土)	第1次試験は東京及び京都。第2次試験及び第3次試験は東京
一般職試験 (大卒程度試験)				
施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験)	S59.4.2～H15.4.1生 障害者手帳等所持		R5.5.27 (土)	東京
障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験)				

※1

- ・H15.4.2以降に生まれた方でも、総合職試験は大学卒又はR6.3までに卒業見込、それ以外の試験は大学・短大・高専卒又はR6.3までに卒業見込であれば受験可能です。
- ・日本の国籍をお持ちでない方、国会職員法第2条の規定により国会職員となることができない方、平成11年改正前の民法の規定による準禁治産の宣告を受けている方 (心神耗弱を原因とするもの以外) は受験できません。
- ・申し込むことができる試験の種類は、1つのみです。(総合職試験には一般職試験 (大卒程度試験) と併願できる総合職特例制度があります。)

※2 受験申込みは、原則国立国会図書館ホームページの受験申込フォームからのオンライン申込みに限ります。当該フォームからの申込みができない場合は、郵送による申込みを受け付けます (受験申込書の郵送交付請求締切り: R5.3.16 (木) 必着、受験申込書による郵送申込締切り: R5.3.23 (木) 消印有効)。

○職務内容

- 総合職試験・一般職試験 (大卒程度試験) ・障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験)
- 調査業務 司書業務、一般事務等の館務

●施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験)

- 施設設備の維持及び管理等に関する業務、設備新営・改修工事に関する設計・監理業務、設備に関する技術に係る調査研究業務並びに当該専門的知識を必要とする業務

○障害のある方へ

- 障害資格を満たせば、障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験)、総合職試験、一般職試験 (大卒程度試験)、施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験) のいずれか一つを受験することが可能です。
- 障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験) 以外の試験を受験する場合も、受験上の配慮を行います。

○専門試験 (記述式) の「史学」の変更について

- 総合職試験及び一般職試験 (大卒程度試験) の第2次試験並びに障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験) の第1次試験の専門試験 (記述式) の選択科目「史学」の選択分野のうち、「東洋史」「西洋史」を統合し、新たに「世界史」として出題します。

○令和4年度試験まで

- ・令和4年度試験まで: 日本史・東洋史・西洋史から受験時に1分野選択
- ・令和5年度試験から: 日本史・世界史から受験時に1分野選択

- その他の選択科目 (法学 (憲法、民法、行政法、国際法から受験時に2分野選択)、政治学、経済学、社

- 会学、文学、図書館情報学、物理学、化学、数学、工学・情報工学 (工学全般、情報工学から受験時に1分野選択)、生物学) の変更はありません。

○試験案内の入手方法

- 次のいずれかの方法で入手可能です。
- ・東京本館、関西館又は国際子ども図書館に来館
- ・郵便で請求
- ・国立国会図書館ホームページからダウンロード

受験申込方法等の採用試験の詳細については、国立国会図書館ホームページの採用情報のページを参照してください。

<https://www.ndl.go.jp/employ/index.html>

○問合せ・資料請求先

総務部 人事課 任用係
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3506) 3315
FAX 03 (3581) 1758

令和5年度
国立国会図書館
職員採用試験

立法を支える調査業務から
知を支える図書館業務まで

申込受付期間
3/6 ~ 3/23
10時 ~ 17時

【第1次試験日】
■総合職試験・一般職試験 (大卒程度試験) 4/29
■施設設備専門職員採用試験 (大卒程度試験) 4/29
■障害者 (係員級) 採用試験 (大卒程度試験) 5/27

詳細は当館ホームページをご覧ください。
<https://www.ndl.go.jp/employ/>

国立国会図書館
National Diet Library

令和5年度採用試験ポスター

NDL Topics

国際子ども図書館展示会 「東洋」の夢 帝国図書館展

国際子ども図書館は、1906年に帝国図書館として落成した建物をリノベーションして活用しています。本展示会は、建築を軸として国際子ども図書館の歴史を紹介する展示の第2弾です。

帝国図書館は「東洋」の図書館を目指して建設されました。今回の展示では、帝国図書館時代に開催された展示会の展示品の一部をパネルで紹介したり、1929年に増築された時の設計図（写し原本）を展示したりするなど、帝国図書館の存在そのものに焦点を当てます。

普段は撮影不可としている会場内も展示会期間中、自由に撮影できます。

さあ、あなたも、帝国図書館時代を体験する旅に出发してみませんか。

○開催期間 3月28日（火）～7月16日（日）

※月曜日、国民の祝日・休日（5月5日のこどもの日は開館）、毎月第3水曜日（資料整理休館日）は休館

※開催予定が変更になる場合があります。最新情報については、国際子ども図書館ホームページなどでご確認ください。

○開催時間 9時30分～17時

○会場 国際子ども図書館レンガ棟3階本のミュージアム

○問合せ先 国際子ども図書館資料情報課 展示係

電話 03(3827)2053（代表）

韓国国会図書館、韓国国会立法調査処との業務交流（第12回）

令和4年12月7日に韓国国会図書館（NARS）、同月22日に韓国国会立法調査処（NARS）との共同セミナー方式による業務交流を、オンライン形式で行いました。この業務交流は、両国の立法補佐機関の間で、それぞれの国会サービスについて深く理解し合うことを目的として行うものです。NARSとのセミナーでは、韓国側から令和4年開設の国家戦略情報センター及び公開準備中の国家戦略情報ポータル等について、日本側から国会議事室内に位置する国会分館の歴史と役割等について報告を行い、両機関における立法補佐機能の特長等に関する意見交換が行われました。NARSとのセミナーでは、韓国側から自動運転車商用化に向けた政策及び立法の動向等について、日本側から自動運転に関する令和4年道路交通法改正の背景と内容に加え、政府、自治体及び企業による現在の取組について報告を行い、日韓両国の政策及び法制度の詳細等に関する意見交換が行われました。



展示会「東洋」の夢 帝国図書館展
ちらし

令和4年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「震災記録を次世代につなぐ」を開催しました

令和5年1月9日、東北大学災害科学国際研究所多目的ホールの会場およびオンラインにて、東日本大震災アーカイブシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、国立国会図書館と東北大学災害科学国際研究所との共催により、毎年1月に開催しているものです。

今年度は、東日本大震災から11年が経過した今、アーカイブや組織を構築する意義と取組について、岩手県宮古市及び復興庁復興知見班から事例が報告されました。また、国立国会図書館および東北大学災害科学国際研究所から事業の進捗報告が行われました。

続くパネルディスカッションでは登壇者全員が参加し、「震災11年だから伝えられること、後世に繋がっていかなくてはならないこと」をテーマに、それぞれの自治体、機関の課題、教訓を生かすこと・教訓が活かされることの定義等について意見交換がなされました。



国立国会図書館からの報告



パネルディスカッション

シンポジウムの詳細は以下に掲載しています。
<https://kn.ndl.go.jp/static/2022/11/171>

NDL Topics

令和4年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会

令和4年12月22日、標記懇談会が開催されました。この懇談会は、国立国会図書館が、国公立大学図書館協力委員会委員館の図書館長及び関係機関の代表者を招いて毎年行っているものです。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点からオンライン形式により行いました。

はじめに、当館から伊藤克尚関西館長が、視覚障害者等用データ送信サービスを中心とした当館の障害者サービスについて概要を紹介しました。次に、大学図書館からの報告として、吉田幸苗国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長が、読書バリアフリー資料メタデータ共有システムを紹介し、続いて、相原雪乃名古屋大学附属図書館事務部長が、同館における障害を持つ利用者へのサービスと今後の課題について報告しました。最後に、松家久美筑波大学学術情報部アカデミックサポート課長が、同大学附属図書館における障害のある学生への資料電子化サービスについて報告し、先に紹介のあった読書バリアフリー資料メタデータ共有システムへの期待を述べました。

その後に行われた意見交換では、出席の大学図書館長から、テキストデータを作成するために撮影する画像のクオリティについて、また、ユーザーインターフェースを改善するために行うユーザーからの意見聴取やそれに対するフィードバックについて質問があり、各報告館が、自館の見解や取組を説明しました。



令和4年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会

新刊案内

レファレンス 865号

令和5年の年頭のご挨拶

企業部門の利益改善と課題―法人企業統計調査で見
る中長期の動向―

核の先制不使用をめぐる政策の動向と論点―米国を
中心に―

警察官装着カメラをめぐる議論（資料）



A4 79頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104・0033 東京都中央区新川1・11・14

電話 03(3523)0812

『国立国会図書館月報』令和5年刊行予定

令和5年は、左記の号を合併号として刊行する予定
です。

・747/748号（令和5年7/8月）

・749/750号（令和5年9/10月）

3

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.3

NO.743
MARCH
2023

CONTENTS

- 01 <Book of the month -from NDL collections>
Tsuzoku isoppu monogatari: The fables of Aesop in the Meiji era
- 06 Reviewing the exhibition “Seek Knowledge throughout the World”
- 10 Lecture related to the exhibition “Reading the Discourses of Literary Translators of the Meiji Era from the Perspective of Translation Studies: Why and how they translate”
SAITO Mino
- 16 Children's Reading Day in 2022
Creativity Starts from Reading: Summary of the lecture by ANDO Tadao
- 19 Renewal of the National Diet Library Digital Collections: Exploring its functions
- 24 Travel writing on world libraries
The National Library of Luxembourg
- 18 < Tidbits of information on NDL >
We want to tell adults about children's literature
- 23 < Books not commercially available >
Soboku-e: Japanese innocent paintings through the ages
- 32 < NDL Topics >

国立国会図書館月報

令和5年3月号 (No.743)

令和5年3月1日発行

発行所 国立国会図書館

編集者 松浦 茂

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 3 . 3

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

士